

潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索 ▶
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第312号
平成21年10月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



撮影：超空正道

且坐喫茶

【出典】『臨濟録』唐の僧臨濟の言行録。弟子慧然が編集したもの。且は、「しばらく」という意。「まあ、坐ってお茶でも召し上げれ」ということ。

いつも
セカセカ
走っている人

いつも
ブツブツ
不平を言っている人

いつも
ブンブン
怒っている人

いつも
エヘンエツヘン
俺は偉いと
ふんぞり返っている人

まあ
しばらく
ここに坐って
お茶でもどうぞ

且坐喫茶

今年は、秋の訪れが随分早いようです。秋の夜長、ゆったりとお茶をいただくのはいいものです。お茶をいただく機会というのは、我が家で、自分で用意していただく場合もあれば、外で、誰かに勧められていただく場合もあります。ただ、「さあ、お茶をどうぞ」と勧められたとき、主客の有り様によって、その意味合いは随分違ってゐるものです。

たとえば、それが劳いねまじの言葉であつたり、お茶ではありませんが、京都で、「ぶぶ漬づけけ（茶漬け）でもどうぞ」は、「もうそろそろお帰り下さい」という意味なのだそうです。同様に、「お茶でもいかが」が、暗に帰宅を促す言葉であつたりする場合もあります。

茶席の床の間に「喫茶去」、あ

るいは「且坐喫茶」の墨跡が掲げられることがあります。ともに、

「さあ、お茶を召し上げられ」という意味で、亭主が茶を点たてて客に勧めるとき、貴賤貧富、老若男女等の区別無く、誰に対しても等しくお点前てまえするのが亭主の作法であり、それが茶道の心得であると、心優しい気配りの言葉として使われているようです。

ところが、それぞれの典故を尋ねると、どうも、そのような意味では使われていないようです。

中国唐時代の有名な禅僧、趙州じょうしゅう禅師のところに二人の修行僧が訪ねてきたときのエピソードです。

（師）前にもここに来たことがあるか？

（僧①）来たことはありません。

（師）喫茶去。

もう一人の僧にも尋ねた。

（師）前にもここに来たことがあるか？

（僧②）来たことがあります。

（師）喫茶去。

院主が趙州禅師に尋ねた。

（院主）前に来たことがない者にも、前にも来たことがある者にも、「喫茶去」とおっしゃるのはなぜですか？

（師）院主さん！

（院主）はい。

（師）喫茶去。（『五燈会元』四）

もう一つの典故は、『碧巖録』第九五則に、「慶いわ云く、作麼生そもせんか是れ如来の語。保福いわ云く、喫茶去。」とあります。つまり、長慶と保福という僧が論議をして、的外な長慶の問いに対して、保福が「喫茶去」と一撃を食らわせたということです。

ここで、「喫茶去」の「去」の

意味を文字どおり「去れ」と採るか、特に意味を持たない助辞と採るかによって、随分そのニュアンスは違ってきます。因みに、近年の解説書の多くは後者を採用しています。しかし、『大漢和辞典』にも、「去」は助辞として、動作の継続や趨勢を示すという記載はありますが、この場合は、どうもしっくりこないような気がいたします。

『岩波仏教辞典』には、はつきりと、「中国唐代の禅僧趙州從諗の語として有名。お茶を飲みに行け。お茶を飲んで目を覚まして来い」の意で、相手の不明を叱責する語。ただし、後に『茶を召し上げれ』の意に解され、お茶を飲むという日常性の中に深い悟りのはたらきを見るときに深い悟りのはたらきになった。」とあります。

一方、「且坐喫茶」の典故は、

『臨濟録』行録一二に、「師云く、竜金鳳子を生じ、碧瑠璃を衝破す。平云く、且坐喫茶。」とあります。つまり、高僧黄檗禅師の弟子である臨濟が、「自分は師を超えた器量だ」と、あまりに自信気な態度に、平和尚が呆れていった言葉が、「且坐喫茶（まあ、ここに坐ってお茶でも飲め）」だったのです。

ですから、この「且坐喫茶」も、「喫茶去」ほど直接的ではないにしろ、相手に対して反省を促す言葉であることに違いはありません。ただ、本来「公案」というものは、優れた禅者の言行録を基に、禅を学ぶための課題としたもので、師が弟子を試み、また評価する手立てとされたものですから、その答えが、必ずしも一つであるとは限らないわけです。そうしてみると、「喫茶去」も「且坐喫茶」

も、いろいろな見方があってもいいのかもしれません。

しかし、禅というのは「きちっとした答えを出さなければ、棒で三十回ぶった叩くぞ（睦州道蹤）」というぐらいいびしい教えであるからして、「喫茶去」や「且坐喫茶」が、単に「ありがとう」と感謝して終わるような言葉であつたとしても、それは禅語とは言えないであります。

浄土の教えである念仏でも同様であります。「どんな罪業深いものでも、念仏すれば阿弥陀様が救ってくれる」からといって、毎日、極楽トンボのような生き方をしていいはずがありません。一見優しいと思える言葉には、実は深い深い奥があるものです。そこを探究するのが、人間の奥深さというものであります。

◎連子窓れんじまど

四角窓の中に稜（すみ）を正面に向けた角材を、縦に細かく並べた「連子窓」は、京都などに代表される日本の古都の民家の最も美しい部分の一つとされているが、この型式はもともとは社寺建築から生まれたもの。

ちなみに、角材を横に並べたものは「横連子」と呼ばれる。

お寺の窓でもう一つ代表的なものには「花頭窓」。もっぱら禅宗の寺に用いられるが、窓枠の形が栗のような形になっているものがある。この窓と屋根を絵に描けば、すぐにお寺だとわかる。一種のシンボルイメージ的存在だが、実はこれ、形が火のように見えるため、もともとは「火燈窓」といったところ。ところが火が嫌われたため、花の

字が当てられたという。

仏教建築から一般に広まったことばとして、ほかに、「引戸」をあげることができ。もちろん、敷居と鴨居に掘った溝の間に戸を入れて横に引く型式だが、これはもっぱら中世の寺院に見られたもの。「障子」も、この引戸の型式が発達したからこそ生まれたもの

雑記



▼感謝

盤子台のご寄付をお願いしましたところ、早速、次の方々からご寄進賜りました。本当にありがとうございました。敬称略、低頭。

- ◎松川隆・喜美江（二万円）
- ◎松村憲一（二万円）
- ◎市野和義（二万円）
- ◎中村鈴子（二万円）

ととってもいい。

戸の型式の一つに「観音開き」と呼ばれるものがある。もちろんこれは、二枚一組で両開きし、中央で合わせる型式のものだが、このことは、観世音の像を納めた厨子の作り方に基づいたもの。建築用語では、**豎釣戸**。（『仏教のことば』早わかり事典）

.....

- ◎江崎正一・初江（二万円）
- ◎中川精一（二万円）
- ◎小島鐮次郎（二万円）
- ◎小島午郎（二万円）
- ◎磯村保臣（二万円） 順不同

▼秋到来

芸術の秋・読書の秋・食欲の秋・行楽の秋等々、皆さまは何の秋？

◆雲見入り老い沁々と

秋の空 沐魚